

チャイム

林 真里奈

小学六年生の健けんの家には、チャイムが無かった。話し声もなかった。人がいないわけではない。父は健が小さい頃に亡くなり、母と二人暮らしだ。しかし健の両親は、耳が生まれつき聞こえなかった。

俺の名前は健。健康の健、そして健聴者の健だ。

「なあ、健の家遊びに行つていい？」

「いや、ごめん。散らかってるから家には呼ぶなって言われてるんだよ」

この会話も、何回繰り返したことがか。家には呼べない。呼びたくない。眉を下げて、口角は少し上げて、申し訳なきような顔を作ってみれば、遊ぶ場所は近所のゲームセンターに決まった。

俺はコーデとして生まれた。コーデとは、ろう者の親をもつ、健聴者のことだ。俺の場合は父さんと母さん、どちらもうる者だから、小さいときなんて言葉を発

することができなくて、耳が聞こえるくせに、手話を先に覚えた。保育園までは、皆家では手話で、保育園では声で話してらんだって、本気でそう思ってた。けど小学校に入学してから、違和感に気がき始めた。友達の家遊びに行った時にお菓子とジュースを持ってきてくれた友達のお母さんは、普通に声を出して、口語で話していた。それに、友達の家には音の鳴るチャイムがあった。どの家にもだ。俺の家には、チャイムらしいものはあっても、音は鳴らずにボタンが押されると部屋についているライトが光るもので、普通とは違う。友達の家テレビには字幕が無くて、出ている芸能人の顔が見やすかった。最初は、俺の家って皆と違うんだなあくらいにしか思っていなくて、特に何も考えていなかった。でも、母の仕事の関係で引越して転校する前の最後の授業参観で、俺の家は、母は、普通

じゃないんだって思い知らされた。

教室に入ってきた母さんは、皆と同じような小綺麗なワンピースを着て、真珠のネックレスをしていた。補聴器は茶色の髪に隠れて、見た目ではろう者だなんて分からない。どうやら普段仕事で来られなかった授業参観に初めて来た母は、それを楽しみにしていたらしく、俺を見るなりニコニコと手を振った。お前の母さん綺麗だな、なんて言われて嫌な気はしなかったけど、なんだか照れくさくて手を振り返すことはしなかった。母さんは一人で来たのかと思っていたが、よくよく考えればろう者である母さんが健聴者向けの授業を理解出来るはずがない。ある程度口の動きで読みとれても、早口の先生の話は分からないし、ましてや黒板の方を向いて座っている俺たちが何を話しているのかなんて、分かりっこないのだ。それに気づいた俺は、国語の授業の始まるのチャイムの音と同時に、後ろを見た。母の隣にはいつもよくしてもらっている健聴者の伯父がいた。伯父は母のほうを向きかわゆるオツケーサインをした右手を軽く振っていた。『チャイム』

という意味の手話だった。チャイムが鳴った、つまり授業が始まるということを経験したいのだろう。音が聞こえない母さんは授業の始まりすら分からないから。それを見た修が、こちらを向いた。

「健の父ちゃんと母ちゃん何してんの？」
本当は伯父だけど、いちいち言わない。

「手話。俺の母さん、耳聞こえないから」
「えーっ！」

授業中にも関わらず、大きな驚く声は教室をざわつかせる。母さんはそれには気づかない。皆がこちらを見ていた。

「健の母ちゃんって障害者だったの！」
障害者。手足が不自由だったりする人をそう呼ぶんだと聞いた。そうか、耳が聞こえないのも、障害なんだ。自分の母が障害者だということを初めて自覚した。こんな最悪の形で。

「そ、静かにしなさい」

先生が注意した。でも先生は若い上に新任で、気の弱い女の人だから、誰も素直に言うことを聞こうとしない。

「じゃあ健は？健はなんで障害者じゃないの？」

頭を、ガツンと石で殴られたような感

覚だった。きっと修には悪気は無い。思っていることをすぐに口に出してしまう、好奇心旺盛なやつだから。ストレートな表現をする手話でのコミュニケーションに慣れてしまった俺は、回りくどい表現をしない修と話すのが楽だった。けど今は、恨めしく思ってしまう。

「は？知らないよ、そんなの」
「えー、気になるじゃん」

早く、早くこの話を終わらせたかった。周りのクラスメイトも、その親も、先生も、皆俺を見ていた。俺の母が、障害者だから。

「障害者って何？」

「あらあ、健くんやけにしっかりしていると思ったらお母様はろうだったのね可哀相に」

「障害者のおうちに生まれるなんて、可哀相ね、大丈夫なのかしら」

ざわざわとしている教室で、そんな言葉が耳が拾う。俺たちがうるさいから、注目されてるんじゃない。俺の親が耳が聞こえないから、障害者だから、皆に見られてこそ何か言われてるんだ。そう気付いた瞬間、顔に血が集まるのが

分かった。

「健って耳聞こえるよな？もしかして手話とかできんの？」

次々と質問を投げてくる修が、うとうとして仕方無かった。可哀相だとか言われて悔しかったし、何も分からず伯父を見ている母さんに腹が立っただし、何より恥ずかしかった。今すぐ視線から逃げたかった。

だから俺は、とっさに机の上の消しゴムをつかみ、

「うるさい！」

修に投げつけた。それを見た母が、俺のほうにかけ寄ってくる。俺は教室を飛び出した。しかし、学校から出る勇気もなく、男子トイレでもっているのを発見され、こっぴどく先生に叱られた。家に帰ってきてすぐ、目の前の母さんが手話を使おうとするのを見て、

「気持ち悪い、障害者」

と早口で言い捨てて、自分の部屋に走った。母の手話なんてもう見たくなかった。今まで言ったことのない暴言を吐いたけど、どうせ母には分からない。家は、とても静かだった。

それから俺はすぐに転校した。小学五年生の春、俺は新しい学校の、新しい友達には、決して母のことはバレないようにしようと心に決めた。授業参観の案内はもらった日に破って、学校のゴミ箱に捨てた。家には、もちろん呼ばない。いつしか母と会話することも少なくなつた。俺にあんな思いをさせた手話が嫌いだった。とにかく、とにかく普通でいようと、なじみの無い音楽を聞いて、母と話すときについてしまった、相手の目をずっと見てしまうクセを直した。普通になるために、コーダだつてバレないように努力した。だから隠し通せていたのに、六年生の夏、俺は過去最大のピンチに陥つている。

「今日から六年一組にろう学校から交流に来てくれる、夏希さんです。夏希さんは耳が聞こえませんか。なので、筆談か手話で話して下さい」

『夏希です。よろしくお願ひします』
ろう者独特の、うなるようなもつた発声と手話で、教卓の前に立った女子が挨拶する。両耳にはカラフルなカバーを

つけた補聴器がつけられていた。髪は後ろに束ねられていて、ピンクのそれが目立つ。教室がざわめいた。

『耳は聴こえないけど、大きく口を動かしてくれたら大体分かります』

横に立っている新海という通訳の男が夏希の言ったことを要約して、声に出して伝えた。皆は、それを聞いてやつと理解したようだ。

「では、夏希さんは健くん隣の席に座して下さいね」

新海先生が手話で訳している間に、俺の隣に机と椅子が置かれ、

「手話ができるの健くんだけだから、色々よろしくね」

と耳打ちされる。何をよろしくしろと言うのだろうか。口語は、こういうところがめんどくさい。それに俺は手話が使えても、使いたくはない。今まで隠してきたのに、水の泡になってしまう。先生をにらみつけたが、効果は無い。そうこうしているうちに、夏希が俺の隣に座った。

『よろしく』
恐らく俺が手話を使えることを知っているのだろう。通訳もわざわざ訳そうとは

はしなかつたし、夏希も声を発さなかつた。思わず手話で返答しそうになつたが、ギリギリのところで踏みとどまり、目線をそらした。すると肩がトントんとたたかれる。

『君、手話分かるんだよね？』

「：はあ」

ため息をついて、机のはじっこに鉛筆で『分かるけど、皆には隠してる。だから筆談で話して』と書いて、夏希が驚いた顔でこちらを見るのを確認すると、急いでそれを消した。夏希は明らかに納得していない顔をしたが、しぶしぶといった感じで鉛筆を取り出した。『なんで？』『バレたくないから』『なんでバレたくない？』『なんでも』そう書いた後夏希が書いた字ごと消して、話すことを放棄すると、夏希は頬をふくらませた。それを見て、不覚にも笑つてしまった。母さんもそうだけど、ろう者は表情が豊かだ。案の定その後、夏希は女子に囲まれて色々質問責めにあつてた。夏希は笑顔で堂々と手話で受け答えていた。それを見て、胸がざわついた。夏希は俺とは違う、直感的にそう思った。

「手話教えてよ！」

「ろう学校ってどんななの？」

皆、我こそはと言わんばかりに夏希に話しかけている。

『いいよ』

『人が少ない、あとは、うーん、そんなに変わらないよ』

少しデリカシーの無い質問を投げかけられた時でも、冗談に変えているし、そもそも皆そんな質問はめったにしなかった。「可哀相」という言葉も、出てくることはない。だって夏希は、何も可哀相じゃないのだ。耳が聞こえないだけで、それ以外は普通の女の子。女子の話をしていると、夏希は面白くて明るい子らしい。そんなことは、遠巻きに見ている俺でも分かった。休み時間には女子が取り囲むから、俺は授業の間だけ、夏希と話すことができた。あくまで教えてもらった体を装って簡単な手話も使ったが、ほとんどは筆談だ。

『健ってコダダでしょう』『なんで？』『そんな感じがするから』『夏希のお母さんとお父さんも耳聞こえないの』『うん、弟も』

コダダとはつきりと明言はしてないくても、夏希にはバレていた。文章を書くのが苦手な母とは違い、夏希は違和感のない、分かりやすい文章を書く。それでも筆談とはめんどくさいもので、いつの間にか数年間毛嫌いして全く使っていない手話を少しずつ使うようになってしまった。

『手話上手だね』『下手でしょ。ろうじやないし、使ってたから、綺麗な手話は出来ない』

手話の話題になると、ハッと我に返って、筆談を再開する。一番後ろの席だからか、まだ俺が手話が出来るということはバレていないようだった。

『なんで使わないの』『言ったら隠してるって』『でも家では使わないといけないでしょ、それになんで隠す必要があるの？』

先生が話さなくなると、鉛筆と紙が擦れる音が響いてしまう。なのにそれに気付かない夏希は、強い筆圧で、早く文字を書く。反対に俺はなるべく音が出ないようにしていた。

『俺の家母さんしかないけど、そん

な喋らないよ。隠してるのは、恥ずかしいから』『なんで恥ずかしいの』『親の耳が聴こえないなんて普通じゃない』『私からしたら、耳が聴こえる方が普通じゃないけどね』

健聴者が普通なわけじゃないとそう書いた夏希は、優しい笑顔を浮かべていた。その笑顔はどこか大人びていて、眩しかった。夏希は、鉛筆を置いた。

『君はお母さんのこと嫌い？』

綺麗で流暢な手話でそう聞かれて、首を傾げた。嫌い、なのかもしれない。けど具体的にどこが嫌いなのかは答えられない。母さんは耳が聞こえないけど毎日仕事に行つて、俺のためだけに夕食を作つて、掃除をする。正直、感謝はしている。それなのに俺は母さんを避けている。

『嫌いじゃないなら、もっと話したほうがいいよ。そうしたらきつと、分かるから』

何が？と聞きたかつたのに、ここでチャイムの音が教室に響いた。びっくりして時計を見ると、いつのまにか授業が終わっていた。今まで黙っていた新海先生が、夏希に向かってオツケーサインをした手

を振った。

「あ、」

既視感があった。それは、俺が母さんを避けるようになった、きつかけの手話。けどあの時と決定的に違うのは、それが当たり前かのように受け入れられていること。

授業が終わって、帰りの会で夏希にお別れの言葉を言うことになった時、代表として俺と一人の女子が手を挙げた。その子はもちろん新海先生の手話通訳を通すから、時間差があった。けど俺の番は、そんな時間差は無かった。通訳なんていらないし、声もいらぬ。必要なのは、勇気だけだ。夏希の前に立った。

『来てくれてありがとう』

目をじっと見て話した。茶色がかった目は、細められていて、うれしそうだ。周りがザワついているのが分かった。筆談しかしていなかったクラスメイトが急に手話ペラペラになったなんて驚くに決まっている。けど上がった声は全て、「すげえ」とか「マジかよ!」とか称賛や驚きの声だった。

『話すの、本当に楽しかった。手話出

来ること隠すのやめるから、またゆつくり話そう』

新海先生は、俺の手話を訳そうとはしなかった。つまりこれは、俺と夏希だけの会話だ。俺は生まれてはじめて、手話を使えてよかったと思つた。

『今度、うちに遊びに来いよ。その時まで、母さんと話しく』

そう言うと、夏希はふふつと笑つた。無理矢理押し出したような発声じゃなく、自然な笑い声だった。

『めちやくちや素直だね。手話は恥ずかしいんじゃない?』

『うるさい』

俺もつられて笑つて、右手を握つて手の甲を夏希に向け、こめかみを2回叩いた。

キーンコーン、と帰りの会の終わりを示すチャイムが鳴つた。俺たちは、そんな気にもしていなかった。関係なかった。

夏希が健の部屋についたライトを光らせるのは、そう遠くない。